

# 往生に関する考察

高橋弘次

## はじめに

ここに取りあげる問題は、古くて新しいともいえる往生の問題である。こんにち往生の問題は、梵文・漢訳などの經典・論疏の類を駆使して、文献学的立場においても、言語学上からも、また思想史上においても、ほぼ論究しつくされているように思われる。<sup>①</sup>

それでもなおここに往生の問題を取りあげるのは、往生の主体ともいうべき、それにともなう内容を少しでも明らかにしたいと思うからである。通仏教の立場からいえば、業思想の問題として、あるいは阿頼耶識の問題として取りあげられて、それが究明されるであらう。<sup>②</sup>しかし浄土教思想そのもののなかで往生の主体、それにともなう内容が究明されているのをあまりみないのである。

浄土に往生することを究極目的とする浄土教思想は、まさに浄土に往生することに主眼があるのであって、その浄土に往生するための念仏を中心とする実践論こそ強調されてしかるべきで、往生そのものを論じ、またそれにともなう往生の主体などに論及することは、余分なことのように考えられるのであらう。といって、これまでにまったく論じられなかったかといえそうではなく、議論の対象となったこともある。ただそれが大きく捉えられて論究される

ということとはなかったようである。

こうした事情のなかで、なお往生の問題を取りあげるのは、少なくとも往生とは、此土を捨てて彼土に往く、ということばで捉えられるが、この此土と彼土との間における、往生、それにともなう主体とはどのように捉えられ、また説明されるのであろうか、といった往生の問題に應えるべきであると考えからである。およそ往生の主体といったことには、充分な究明がおよばないことを承知しながらも、なおその辺の事情をさぐってみようと思うのである。

この現実の世界・此土から極楽浄土の彼土にいたる間に、往生するのはいったい何が往生するのか、また何によって往生するのか、といった問題が明らかにされるならば望外のことといわねばならない。少くとも往生を求めるものにとって、往生の主体とはこの「自分」であることに変りないが、自分のなかの何か、あるいは何によってか、が究明されればと思う。そこでまず往生の定義からみてみよう。

## 一 往生の定義とその内容

法然(二三〜三三)は『往生要集釈』につきのように往生を定義づけている。

言<sup>ハ</sup>往生<sup>ト</sup>者、捨此<sup>レ</sup>往彼<sup>ニ</sup>蓮華<sup>ニ</sup>化生<sup>ナリ</sup>。草菴<sup>ニ</sup>瞑<sup>ヒ</sup>目<sup>ヲ</sup>之間<sup>ダ</sup>、蓮台<sup>ニ</sup>結<sup>フ</sup>脚<sup>ヲ</sup>之<sup>ヲ</sup>程時<sup>ナリ</sup>。即從<sup>ニ</sup>弥陀<sup>ノ</sup>仏<sup>ヲ</sup>聖衆<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>、在<sup>ニ</sup>菩薩<sup>ノ</sup>衆<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>、一念之頃<sup>ニ</sup>往生<sup>ス</sup>西方<sup>ニ</sup>極樂<sup>ノ</sup>世界<sup>ニ</sup>。故言<sup>ニ</sup>往生<sup>ス</sup>也<sup>③</sup>。

「往生」というのは、此を捨てて彼に往き、蓮華に化生す」とあるのが往生の定義づけであり、つづいて「草菴に目を瞑ぐの間、蓮台に脚を結ぶ程の時なり。すなわち弥陀仏の聖衆の後に従い、菩薩衆の中において、一念の頃に、西方極樂世界に往生す。ゆえに往生というなり。」とあるのは、往生する状態を説明したものである。

まず往生が「此を捨てて彼に往く」と定義づけられるのは、現実の世界・此土を捨てて、浄土の世界・彼土に往生す

る、という内容を示したものであり、ついでそのことが、浄土の「蓮華に化生する」ということばで示されることになる。これを浄土に往生する過程のうえからいえば、浄土に往生して、ついで浄土の蓮華のなかに化生するということになる。<sup>④</sup> このことは『観無量寿經』の上・中・下の九品段の説示によって一層明らかとなるが、ここでは閑説をさけたい。

ところで、この往生とは「捨此往彼、蓮華化生」ということばで定義づけられたとしても、なおその原語（梵語）の意味のとり方によって、その内容が左右されていると考えられる。法然の浄土教義に立つものは、何ら原語にふれる必要もないわけであるが、いまだしその原語を梵文『無量寿經』（阿弥陀經も含む）のなかにみて、その原意をさぐっておきたい。

すでに藤田宏達氏も指摘しているように、往生の原語としては、*upadyate*, *utpanna*, *upapadyate*, *upapatti*, *upapanna*, *pratyājyate*, *pratyājāta* などの語があげられる。<sup>⑤</sup> 前の二つの語は *ud + √pad* からなる語で「生起する」という意味であり、つぎの三つの語は *upa + √pad* からなる語で「生れる、再び生ずる」という意味を示し、あとの二つの語は *prati + a + √jan* からなる語で「再び生ずる」という意味をもつ語である。<sup>⑥</sup> いずれの語も「生れる」ということの意味をあらわす語であり、それぞれの語の示す意味は微妙に異なるところがあるといっても、浄土に往生することを示していることに変わりないものと思われる。

ついで「蓮華化生」という、往生する状態を示す化生も、たんに生物として生れてくる状態を区別する、胎生、卵生、湿生、化生といった説明でおわるものではない。そもそも浄土に往生することも、われわれの現実の世界における「生れる」ということばで表現されるが、実際にわれわれの人間の世界における「生れる」という事象と同じであるかといえば、そうではない。そこを化生ということばで表わしているのである。

この化生という語の原語も梵文『無量寿経』にみられる upapadika がそれであり、動物や人間の生れる状態から区別されて、自らの力によって忽然として現われること (birth, incarnation) を意味する。つまり浄土に往生するという状態が、蓮華のなかに化生することばにおいて表現されるということは、往生がたんに生物などの「生れる」ということでなく、胎生、卵生、湿生とまったく異なる生じ方することを表わしているといえる。

そこでいまい少し『無量寿経』において化生という語がどのように使用されているかをみてみよう。

爾時慈氏菩薩白<sup>レ</sup>仏言<sup>ニ</sup>世尊何因何縁彼国人民胎生化生<sup>ナル</sup>仏告<sup>ニ</sup>慈氏<sup>ニ</sup>若有<sup>ニ</sup>衆生<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>疑惑心<sup>ヲ</sup>修<sup>ニ</sup>諸功德<sup>ヲ</sup>願<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>彼国<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>了<sup>ニ</sup>仏智不思議智不可称智大乘広智無等無倫最上勝智<sup>ヲ</sup>於<sup>ニ</sup>此諸智<sup>ニ</sup>疑惑不<sup>レ</sup>信然猶信<sup>ニ</sup>罪福<sup>ヲ</sup>修<sup>ニ</sup>習<sup>ニ</sup>善本<sup>ヲ</sup>願<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>其国<sup>ニ</sup>此諸衆生<sup>ニ</sup>彼宮殿<sup>ニ</sup>寿五百歳<sup>ヲ</sup>常不<sup>レ</sup>見<sup>ニ</sup>仏<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>聞<sup>ニ</sup>經法<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>ニ</sup>菩薩声聞聖衆<sup>ヲ</sup>是故於<sup>ニ</sup>彼国土<sup>ニ</sup>謂<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>胎生<sup>ト</sup>若有<sup>ニ</sup>衆生<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>仏智<sup>ヲ</sup>乃至勝智<sup>ヲ</sup>作<sup>ニ</sup>諸功德<sup>ヲ</sup>信心廻向<sup>スレハ</sup>此諸衆生<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>七宝華中<sup>ニ</sup>自然化生<sup>ニ</sup>跏趺而坐<sup>ス</sup>須臾之頃身相光明智慧功德如<sup>ニ</sup>諸菩薩<sup>ニ</sup>具足成就<sup>ス</sup>⑩

この説相からみれば浄土に往生するのに、胎生往生と化生往生の二つがあることが指摘される。まず胎生往生とは「若し衆生ありて疑惑の心を以て、諸の功德を修して彼の国に生ぜんと願わんに、仏智、不思議智、不可称智、大乘広智、無等無倫最上勝智を了せず。此の諸の智において疑惑して信ぜず。然れどもなお罪福を信ずるを以て善本を修習して其の国に生ぜんと願ず。此の諸の衆生、かの宮殿に生じて寿五百歳まで、常に仏を見たてまつらず。經法を聞きたてまつらず。菩薩声聞聖衆を見たてまつらず。是のゆえに彼の国土においてこれを胎生という。」とあるのがそれである。

ついで化生往生とは、「若し衆生ありて明かに仏智乃至勝智を信じて、諸の功德を作して信心回向せば、此の諸の衆生は七宝の華において自然に化生して跏趺して坐し、須臾の頃に身相光明智慧功德、諸の菩薩の如く具足し成

就す。」とあるのがそれである。

胎生往生という場合、この説相では「かの宮殿に生じて」というところに相当するものと思われるが、それは宮殿のなかにあって、仏も見ないままとどまっている状態をいつているものと思われる。ついで化生往生という場合、この説相では「七宝の華の中において自然に化生し」というところに相当するものと思われるが、それは蓮華のなかに生じて、華は開いて仏とあいまみえる状態をいつているものといえよう。

そこで『無量寿経』は、その胎生往生と化生往生との得失をつぎのように説き示している。

復次慈氏他方仏国諸大菩薩発心欲見下無量寿仏上恭上敬供養及諸菩薩声聞之衆ニ彼菩薩等命終得生ニ無量寿国ニ於ニ七宝華中ニ自然化生弥勒当知彼化生者智慧勝故其胎生者皆無智慧ニ於ニ五百歳中ニ常不見レ仏不見レ經法ニ不見レ菩薩諸声聞衆ニ無レ由供養於仏ニ不レ知ニ菩薩法式ニ不レ得修習功德ニ当知此人宿世之時無レ有ニ智慧ニ疑惑所<sup>ス</sup>致<sup>ス</sup>

「他方仏国の諸の大菩薩、発心して無量寿仏を見たてまつり、及び諸の菩薩声聞の衆を恭敬し供養せんと欲せば、彼の菩薩命終して無量寿国に生ずることを得て、七宝の華の中において自然に化生す、弥勒まきに知るべし、彼の化生の者は智慧すぐれたるがゆえなり。其の胎生の者はみな智慧なきをもつて五百歳の中において、常に仏を見たてまつらず経法を聞かず、菩薩ももろの声聞衆を見ず。仏を供養するに由なし、菩薩の法式を知らず、功德を修習することを得ず、まさに知るべし、此の人は宿世のとき、智慧あることなくして疑惑せしが致すところなり。」というのであるから、胎生往生と化生往生の差異・得失は明らかであり、胎生よりも化生の勝れていることが知られる。

いづれにせよ、ここで胎生という場合、動物の胎生と同じように考えられてはならない。この胎生は四生という胎生と異なることは明らかである。このことについて藤田宏達氏はつぎのように述べている。「恐らく蓮華の「内奥(＝胎)

の住所 (garbhavasa) に生れることを「胎生」と訳したに過ぎないものであろう。しからばこれによって極楽への生れ方に「四種の生まれ」でいうような「胎生」があるとするのは、正しいとは言えない<sup>⑧</sup>。

往生が「捨此往彼、蓮華化生」と定義づけられるその内容は、この現実の世界を捨てて、かの浄土の世界に往き、開かれた蓮華のなかに生ずるということになる。そして、その蓮華のなかに生ずるという化生は、そのことは自体 (upapaduka)、「自己より生起する」「両親なくして生れたる<sup>⑨</sup>」とか、「self-produced, a superhuman being」と意味づけられるように、浄土に往生すればおのずと開かれた蓮華のなかに生起する状態を表わしているといえよう。

そしてその往生したものがいかなる様相をとるのか、ということとは『無量寿経』に説き示されている。

阿難彼仏国土諸往生者具足如是清淨色身諸妙音声神通功德<sup>⑩</sup>所<sup>⑪</sup>處宮殿衣服飲食衆妙華香莊嚴之具猶第六天自然之物若欲食時七宝盃器自然在前金銀瑠璃碑礪珊瑚琥珀明月真珠如是諸盃隨意而至百味飲食自然盈滿雖有<sup>⑫</sup>此食<sup>⑬</sup>實無<sup>⑭</sup>食者<sup>⑮</sup>但見色聞香意以<sup>⑯</sup>為食<sup>⑰</sup>自然飽足身心柔軟無<sup>⑱</sup>所<sup>⑲</sup>味著<sup>⑳</sup>事已化去時至復現彼仏国土清淨安穩微妙快樂次<sup>㉑</sup>於無為泥洹之道<sup>㉒</sup>其諸声聞菩薩天人智慧高明神通洞達咸同一類形無<sup>㉓</sup>異狀<sup>㉔</sup>但因<sup>㉕</sup>順<sup>㉖</sup>余方<sup>㉗</sup>故有<sup>㉘</sup>天人之名<sup>㉙</sup>顏貌端正超<sup>㉚</sup>世希有<sup>㉛</sup>容色微妙非<sup>㉜</sup>天非<sup>㉝</sup>人皆受<sup>㉞</sup>自然虛無之身無極之体<sup>㉟</sup>

「かの仏の国土において、諸の往生せる者は、是のごとき清淨の色身、諸の妙音声・神通の功德を具足す。」とあるように、往生したものの徳相が示され、さらに仏の国土における生活の様相がつぶさに説かれているのである。ついで「顏貌端正にして、世に超えて希有なり。容色微妙にして天にあらず人にあらず。みな自然・虚無の身、無極の体を受く。」とあるように、浄土の世界に生れたものは、その身体がまさにさとり（涅槃）の体となるのである。

こうした浄土の世界に往生したものの様相は、いろいろな解釈されるであろう。しかし世親は『往生論』（無量寿

經優婆提舍願生偈)で、

如来淨華衆、正覺華化生<sup>ス⑩</sup>

と説き示している。すなわち「如来淨華の衆、正覺の華より化生す」とあるように、淨土の世界に生れた往生者は、まさに正覺(さとり)の華から化生したものであるとして捉えている。このように往生の様態をみると、淨土の世界に往生したものは、同時にさとり(正覺・涅槃)に通ずるものとして捉えられていることが知られる。ただ往生即菩提(さとり)とならないところに、淨土教における特色が窺えるともいえよう。

## 二 往生は心意による

往生の定義づけとその内容について述べるとともに、往生者が淨土の世界において得る徳相まで『無量壽經』の説相にもとづいて明らかにした。いま少し淨土の世界に往生するということが、どのように捉えられるのか、というところを淨土教の祖師(曇鸞・道綽)の解釈にもとづいて明らかにしてみたい。

中国の淨土教の祖師・曇鸞(四笑く語三)は、世親の『往生論』における「願生安樂国<sup>⑪</sup>」という一句を『往生論註』で解釈してつぎのようにいっている。

願生安樂国者此一句是作願門天親菩薩歸命之意也其安樂義具在下觀察門中問曰大乘經論中處處說眾生畢竟無生如虛空云何天親菩薩言願生耶答曰說眾生無生如虛空有二種一者如凡夫所謂實眾生如凡夫所見實生死此所見事畢竟無所有如龜毛如虛空二者謂諸法因緣生故即是不生無所有如虛空天親菩薩所願生二者是因緣義因緣義故假名生非如凡夫謂有實實眾生實生死也問曰依何義說往生答曰於此間假名人中修五念門前念与後念作因穢土假名人淨土假名人不得決定一不得決定異前心後心亦復如是

以故若一 則無因果 若異 則非相統 是義觀一異門<sup>⑧</sup>

このなか「大乘經論の中、処々に衆生畢竟じて無生なること虚空の如しと説けり」とあるのは、『大智度論』三八（往生品）に「衆生畢竟じて不可得……衆生の諸の異名字みな空にして実になし」とある説相にもとづくが、この『往生論註』における願生（往生）の解釈も『大智度論』の説にもとづくところが大きい。そこで本来「無生」といわれるものを天親（世親）はどうして「願生」といい表わすのか、という問いからはじまる。

その答えは「衆生無生なること虚空の如しと説くに二種あり。一には、凡夫の謂う所の如きは実の衆生なり。凡夫の見る所の如きは実の生死なり。此の所見の事、畢竟じて所有なきこと亀毛の如く虚空の如し。二には謂わく、諸法は因縁生の故に即ち是れ不生なり。所有なきこと虚空の如し、天親菩薩の願生する所は是れ因縁の義なり。因縁の義なるが故に仮名の生なり。凡夫の実の衆生、実の生死ありと謂うが如きにはあらざるなり。」とある。

つまり縁起の道理からいえば、すべて因縁所生で、凡夫が実際にいう衆生も、じつは無生・虚空のごときものであるというのである。時間的・空間的な制約をうけている俗諦の立場からいえば、実際に生死ありというべきである。時間的・空間的な制約をうけない真諦の立場からいえば、すべて因縁所生・無生・虚空というべきである、というのである。したがって天親（世親）は俗諦の立場から「願生」といつているのであって、じつは「仮名の生」というべきである、というのである。

そこでつぎに、「いかなる義に依りてか往生を説くや」と問う。答えは「此の間の仮名の人の中に於いて五念門を修するに、前念は後念のために因となる。穢土の仮名の人と浄土の仮名の人と、決定して一なることを得ず、決定して異なることを得ず。前心後心も亦復た是の如し。何を以ての故に。若し一ならば則ち因果なし。若し異ならば則ち相統にあらず。是の義は観一異門なり。」とある。



浄土の世界に往生を願う穢土の仮名人（衆生）と浄土の世界に往生したところの仮名人（往生者）とは、因縁所生の道理からいって、同じ（一）でもなく、また異なるものでもない、というのである。このことは穢土なる現実の世界と浄土の世界との断絶を認めながらも、穢土から浄土に往生を願う仮名人と、また浄土に往生したところの仮名人との連続性（相続）と、同一性の否定をいつているものと理解される。つまり前念（前心）は後念（後心）のために因となる、とは前念・後念の因果性とともに連続性をいい、それが同一性において認められず、また異質性とも認められないのである。しかしその反面で、五念門を修していくなかでの前念・後念の念（心）に、一つの同一性・連続性の認められるところに注意したい。

「若し一ならば因果なし、若し異ならば相続なし」といい、これを「観一異門」というが、ここには前念・後念、前心・後心という、念・心にかかわる同一性と連続性が認められ、いわば往生の主体がいかなるものにかかわるかが想起される。同じく『往生論註』に、

我一心者天親菩薩自誓之詞言念無礙光如来願生安樂一心心相続無他相間雜（スル）間曰仏法中無我此中何以称我答曰言我有三根本一是邪見語二是自大語三是流布語今言我者天親菩薩自指之言用流布語非邪見自大也

とある「一心心相続して他相間雜することなし」という内容、さらにはそれが「仏法の中には我なし」と註釈されている内容に、浄土の世界に往生していくものの体質がうかがわれるといえよう。

ところで曇鸞は浄土の世界に往生することを強調するが、その往生をどこまでも「無生の生」として捉える。同じく『往生論註』に、

明下彼浄土是阿弥陀如来清浄本願無生之生非如三有虚妄生也何以言之夫法性清浄畢竟無生言生者是得生

者之情耳。

とあり、「安樂国に願生す」といっても、それは「阿弥陀如来の清浄本願無生の生」であるという。ただ「生」というのは得生のもの立場からいうのである、という。

この「無生の生」ということはつぎの曇鸞の註釈によって一層明らかとなる。

問曰上言レ知ニ生無生一当ニ是上品生者一若下下品人乗ニ十念ニ往生スルニヤ取ニ実生ニ耶但取ニ実生ニ即墮ニ二執ニ一恐  
不レ得ニ往生ニ二恐更生ニ生レ感答譬如下淨摩尼珠置ニ之濁水ニ水即清浄ニ若人雖有ニ無量生死之罪濁聞ニ彼阿弥陀如  
来至極無生清浄宝珠名号ニ投ニ之濁心ニ念念之中罪滅心淨即得ニ往生ニ又是摩尼珠以ニ玄黄幣ニ裹投ニ之於水ニ水即玄  
黄一如ニ物色ニ彼清浄仏土有ニ阿弥陀如来無上宝珠一以ニ無量莊嚴功德成就帛ニ裹投ニ之於所ニ往生ニ者心水上豈不レ能  
転ニ生見ニ為ニ無生智乎又如ニ氷上然レ火火猛則氷解氷解則火滅一彼下品人雖不レ知ニ法性無生ニ但以下称ニ仏名ニ力上  
作ニ往生意願ニ生ニ彼土ニ彼土は無生界見生之火自然而滅。

この問いは、「無生の生」というのは上品生のものにいいえるのであって、下下品のものにはいいえないのではないか、  
というのである。その答えは、「譬えば淨摩尼珠を之を濁水に置けば水即ち清浄なるが如し。若し人無量生死の罪濁あ  
りと雖も、彼の阿弥陀如来の至極無生の清浄宝珠の名号を聞きて之を濁心に投ずれば、念念の中に罪滅し心淨くして  
即ち往生を得。また是れ摩尼珠を玄黄の幣を以て裹みて之を水に投ずれば、水即ち玄黄にしてもつばら物の色の如  
し。彼の清浄仏土に阿弥陀如来の無上の宝珠あり、無量の莊嚴功德成就の帛を以て裹みて、之を往生する所の者の心  
水に投ずるに、豈に生の見を転じて無生の智となすこと能わざらんや。また氷の上に火を然くに、火猛きときは則ち  
氷解け、氷解くるときは則ち火滅するが如し。」といい、さらに「彼の下品の人、法性無生を知らずと雖も、但だ仏  
名を称する力を以て往生の意を作して彼の土に生ぜんと願ずれば、彼の土は無生の界なれば見生の火自然に滅す。」

というのである。

下品生のものは法性無生の理を知らないといっても、淨摩尼珠のような作用をもつ阿弥陀如来の名号を称すれば、かの淨土の世界に生じて、見生の火（煩惱）滅して自然に無生の生が得られるというのである。このように往生を「無生の生」として表わすのは、「生の見を転じて無生智」を得るところに往生が現成すると捉えるからである。つまり往生が、たんに生死の生・実の生として捉えられることを強く否定しようとするものである。

このように曇鸞は、往生を「無生の生」として捉え、現実の世界における実の生としてみることを強く否定した。しかしその反面、往生を求める願生者が、ただ称名念仏によって目的（淨土往生）が達せられるとしても、往生の過程、往生していく様相は、これを否定するすべなく、過程・様相の説明をほどこしている。つまり、「前念・後念」「前心・後心」「心心相續」といった、心地・意地の領域において、往生が現成していくという過程・様相を説き示しているということである。往生を求めるものに「在心・在縁・在決定」といった、心意的な条件を説き示すのもそれであろう。

こうした曇鸞の往生についての解釈をうけて、道綽（美二六四）はその著『安樂集』において、さらに往生の解釈につとめる。まず曇鸞の「在心・在縁・在決定」についての註釈をほどこして、つづいてつぎのようになう。

問曰既云垂終十念之善能傾一生惡業得生淨土者未知幾時為十念也答曰如經說云二百一十生滅成ニ一刹那六十刹那以為一念此依經論汎解念也今時解念不取此時節但憶念阿弥陀若總相若別相隨所緣觀一還於十念無他念想間雜是名十念又云十念相續者是聖者數之名耳但能積念凝思不緣他事使業道成弁便罷不用亦未勞記之頭數也又云若久行人念多依此若始行人念者記數亦好此亦依聖教

この問答の、まず問いは臨終の十念によって往生する、という内容をたずねているのであるが、その答えは「經に

説きというが如く、百一の生滅、一刹那を成す。六十刹那を以て一念と爲す。此れ経論に依りて汎く念を解す。今時念を解するに此の時節を取らず。但だ阿弥陀仏、若は総相、若は別相を憶念して縁觀する所に随いて、十念を還るに他の念想間雜することなき、是れを十念と名く。また云うべし、十念相統とは是れ聖者の一の数の名なるのみ、但だ能く念を積み思いを凝して他事を縁ぜず、業道をして成弁せしむれば便ち罷て用いず。また未だ勞しくこれが頭数を記せず。また云うべし、若し久行の人の念は多く此に依るべし。若し始行の人の念は数を記するもまた好し、此れまた聖教に依るなり。」とある。

阿弥陀仏の総相・別相を憶念し縁觀するのに他の念想を間雜しないことを十念といい、またよく念を積み思いを凝して他事を縁じないで、業道を成就することを十念相統という、というのである。これをみて往生が、念想・凝思の心意領域において成就されることが知られる。十念がただ時間や数の問題でないということもあわせて考えるならば、往生の成否が何によるかが一層明らかとなる。

さらに道綽の『安樂集』における、つぎの問答において往生の内容が具体的に示される。

問曰如<sup>キ</sup>上<sup>ニ</sup>所<sup>ノ</sup>言<sup>ハ</sup>知<sup>ル</sup>ニ生<sup>ハ</sup>無<sup>ハ</sup>生<sup>ナリト</sup>ニ當<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>品<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>者<sup>ハ</sup>若<sup>ハ</sup>爾<sup>ハ</sup>下<sup>ニ</sup>品<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>乘<sup>ニ</sup>十<sup>ノ</sup>念<sup>ニ</sup>往生<sup>スルハ</sup>者<sup>ハ</sup>豈<sup>ハ</sup>非<sup>レ</sup>取<sup>ル</sup>實<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>也<sup>ハ</sup>若<sup>ハ</sup>實<sup>ニ</sup>生<sup>ノ</sup>者<sup>ハ</sup>即<sup>チ</sup>墮<sup>ニ</sup>疑<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>恐<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>往生<sup>ヲ</sup>ニ謂<sup>フ</sup>此<sup>ノ</sup>相<sup>ノ</sup>善<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>与<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>因<sup>ト</sup>也<sup>ハ</sup>答<sup>ハ</sup>曰<sup>ク</sup>釈<sup>スルニ</sup>有<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>番<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>譬<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>淨<sup>ニ</sup>摩<sup>ニ</sup>尼<sup>ニ</sup>珠<sup>ノ</sup>置<sup>ニ</sup>濁<sup>ニ</sup>水<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>珠<sup>ノ</sup>威<sup>ニ</sup>力<sup>ヲ</sup>水<sup>ハ</sup>即<sup>チ</sup>激<sup>ニ</sup>清<sup>ニ</sup>若<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>雖<sup>モ</sup>有<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>量<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>死<sup>ノ</sup>罪<sup>ノ</sup>濁<sup>ニ</sup>若<sup>ハ</sup>聞<sup>ニ</sup>阿<sup>ニ</sup>弥<sup>ニ</sup>陀<sup>ノ</sup>如<sup>ノ</sup>來<sup>ノ</sup>至<sup>ニ</sup>極<sup>ノ</sup>無<sup>ニ</sup>生<sup>ノ</sup>清<sup>ニ</sup>淨<sup>ノ</sup>宝<sup>ノ</sup>珠<sup>ノ</sup>名<sup>ノ</sup>号<sup>ヲ</sup>投<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>濁<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>念<sup>ノ</sup>念<sup>ノ</sup>之中<sup>ニ</sup>罪<sup>ノ</sup>滅<sup>ニ</sup>心<sup>ノ</sup>淨<sup>ニ</sup>即<sup>チ</sup>便<sup>ニ</sup>往生<sup>ス</sup>ニ如<sup>ハ</sup>下<sup>ニ</sup>淨<sup>ニ</sup>摩<sup>ニ</sup>尼<sup>ニ</sup>珠<sup>ノ</sup>以<sup>ニ</sup>玄<sup>ノ</sup>黄<sup>ノ</sup>帛<sup>ヲ</sup>裹<sup>ニ</sup>投<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>水<sup>ニ</sup>水<sup>ハ</sup>即<sup>チ</sup>玄<sup>ノ</sup>黄<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>如<sup>ハ</sup>物<sup>ノ</sup>色<sup>ハ</sup>彼<sup>ノ</sup>清<sup>ニ</sup>淨<sup>ノ</sup>仏<sup>ノ</sup>土<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>阿<sup>ニ</sup>弥<sup>ニ</sup>陀<sup>ノ</sup>如<sup>ノ</sup>來<sup>ノ</sup>無<sup>ニ</sup>上<sup>ノ</sup>宝<sup>ノ</sup>珠<sup>ノ</sup>名<sup>ノ</sup>号<sup>ヲ</sup>以<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>量<sup>ノ</sup>功<sup>ノ</sup>德<sup>ノ</sup>成<sup>ニ</sup>就<sup>ニ</sup>帛<sup>ヲ</sup>裹<sup>ニ</sup>投<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>往<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>心<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>之中<sup>ニ</sup>豈<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>轉<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>生<sup>ノ</sup>智<sup>ト</sup>乎<sup>ハ</sup>三<sup>ニ</sup>亦<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>氷<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>然<sup>ニ</sup>火<sup>ノ</sup>火<sup>ハ</sup>猛<sup>ニ</sup>則<sup>チ</sup>冰<sup>ハ</sup>液<sup>ニ</sup>決<sup>ス</sup>液<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>火<sup>ハ</sup>滅<sup>ス</sup>彼<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>品<sup>ノ</sup>往<sup>ニ</sup>生<sup>ノ</sup>人<sup>ハ</sup>雖<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>法<sup>ノ</sup>性<sup>ノ</sup>無<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>但<sup>ハ</sup>以<sup>ニ</sup>称<sup>スル</sup>仏<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>力<sup>ヲ</sup>作<sup>ニ</sup>往<sup>ニ</sup>生<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>願<sup>スレハ</sup>生<sup>ニ</sup>彼<sup>ノ</sup>土<sup>ニ</sup>既<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>生<sup>ノ</sup>界<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>生<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>火<sup>ハ</sup>自<sup>ラ</sup>然<sup>ニ</sup>而<sup>モ</sup>滅<sup>ス</sup>也<sup>ハ</sup>

この問答は曇鸞の『往生論註』に展開されている往生の内容規定にもとづくものであるが、ここにおいてもその結論は「彼の下品往生の人は法性の無生を知らずと雖も、但だ仏名を称する力を以て往生の意を作して彼の土に生ぜんと願すれば、既に無生の界に至る。時に見生の火自然に滅するなり。」とある。「往生の意を作す」ところに、「無生の界に至る」ことのできる様態が示されている。もとよりそれは仏名を称する力を以てのことであるが、心意の領域がどこまでも往生の成否の要因になっていることは明らかである。

つづいて往生についての問答がなされる。

問曰依何身<sup>ルカノニ</sup>故説<sup>ニ</sup>往生<sup>ニ</sup>也答曰於此間<sup>ノ</sup>仮名人<sup>ノ</sup>人中<sup>ニ</sup>修<sup>スル</sup>諸行門<sup>ヲ</sup>前念<sup>ヲ</sup>与<sup>ハ</sup>後念<sup>ヲ</sup>作<sup>ル</sup>因<sup>ト</sup>穢土<sup>ノ</sup>仮名人<sup>ノ</sup>淨土<sup>ノ</sup>仮名人<sup>ノ</sup>不得<sup>ニ</sup>決定<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>不得<sup>ニ</sup>決定<sup>ニ</sup>異<sup>ニ</sup>前心<sup>ヲ</sup>後心<sup>ヲ</sup>亦如是<sup>モ</sup>何以故<sup>ノ</sup>若決定<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>則無<sup>ク</sup>因果<sup>ニ</sup>若決定<sup>ニ</sup>異<sup>ニ</sup>則非<sup>ニ</sup>相統<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>是義<sup>ヲ</sup>故横豎雖<sup>モ</sup>別<sup>ナリト</sup>始終<sup>ニ</sup>是一<sup>ノ</sup>行者也<sup>ヲ</sup>

この問いは「何の身に依るが故に往生を説くや」というのであるから、いわば往生の主体を窺っているともいえよう。その答えはほぼ『往生論註』のものと変らないが「此の間の仮名の人中に於て諸の行門を修するに、前念は後念のために因と作る。穢土の仮名人と淨土の仮名人と決定して一なることを得ず。決定して異なることを得ず。前心後心もまた是の如し。何を以ての故に。若し決定して一ならば則ち因果無く、若し決定して異なるならば則ち相統に非ず。是の義を以ての故に横豎別なりと雖も始終是れ一りの行者なり。」とあるのである。

穢土の仮名人と淨土の仮名人と同じともいえず、また異るともいえない、のであるが、そこに相統していくものは、前念・後念（前心・後心）の心意の領域のものであり、それはまさに往生を求める人のそれであるということができよう。つまり往生は「無生の生」として捉えられたとしても、また虚空のごときものとして表わされたとしても、その主体となるものは、見生の滅したる心意の領域のものであるといつて大過はないであろう。心意はどこまで

も執着・虚妄のものであるという前提があればこのことはいえない。しかし、ただ仏名を称する往生人の心意そのものは、執着・虚妄の領域のものでないともいえよう。

道綽は曇鸞が説き示した往生を求めるものへの心意的な条件として「在心・在縁・在決定」をつぎのように註釈している。「此の十念とは善知識の方便安慰に依りて実相の法を聞くより生ず」（在心）、「此の十念は無上の信心に依止し、阿弥陀如来の真実清淨無量功德の名号に依りて生ず」（在縁）、「此の十念は無後心無間心に依止して起る」（在決定）<sup>①</sup>。この往生を成就させる十念が、「実相の法を聞き」「無上の信心に依止し」「無後心無間心に依止し」て生じたものである、とみる立場からも、往生の心意によることの内容が理解されよう。

### 三 前念後念と念死念仏

曇鸞の『往生論註』や道綽の『安樂集』にみられる往生の捉え方をみてきたのであるが、この曇鸞・道綽の浄土教思想を受けとめて、さらに中国において浄土教思想を大成させた善導（三六二）の往生についての捉え方をいさ少しみてみよう。

善導は『往生礼讃』につぎのように説き示している。すなわち、

仰願一切往生人等善自思量 已能令身願生 彼国者行住坐臥必須心剋己 昼夜莫廢 畢命為期、上在ニ一形ニ似少苦 前念命終後念即生 彼国ニ長時永劫常受無為法樂 乃至成仏ニ不經生死 豈非快哉応知。

とある。まずすべての往生人に対して「行住坐臥に必ず心を励まし、己をせめて昼夜に廢することなく畢命を期となすべし」といい、つづいて「前念に命終して後念にすなわち彼の国に生ず。長時永劫に常に無為の法樂を受く、乃至成仏まで、生死をへず、あに快きにあらずや」という。

曇鸞・道綽の往生の捉え方を受けて、善導も「前念に命終して、後念に往生する」といい、さらに「長時永劫につねに無為の法樂を受く、乃至成仏まで、生死をへず、あに快きにあらずや」という。曇鸞や道綽は前念・後念の因果性のうえに往生の過程・様態をみていたが、善導は一步進めて「前念に命終して、後念に往生する」というように、前念・後念をより具体的にとらえて往生の過程・様態を説き示めそうとしている。つまり命終することと往生するところが、前後の念（心）にかかわって示されているということである。

「前念に命終して、後念に往生する」といつていることは、人間の念という「いきさま」のなかに、命終も往生もあるということである。しかもそれは「生死をへず」という後につづくことばと合せて考えるならば、この念はたんなる念（心）ではなく、称名念仏をして往生を求めるものの念ということになるが、所詮「いきさま」のなかにあつての心意の領域のものであることに変わりなからう。ただその念が「生死をへず」といわれる立場からいえば、それは念仏の念として、見生（執着・虚妄）の域を超えたものであるといえよう。

もし聖・俗、真実・虚妄という分別によつて念（こころ）<sup>④</sup>が分けられたとしても、所詮、念仏を申し往生を求めるものの人間のころであつてみれば、人間の「いきさま」<sup>⑤</sup>のなかのものであらう。「前念に命終して、後念に往生する」する念とは、まさに念仏の念であり、仏を念ずる念である。それは現実の世界から浄土の世界に通ずる念であり、永遠につながつていく念であり、生死の世界を超えていく念であるといえよう。いわば、この念こそ往生の主体ともなるものといえよう。限りある肉体生命をもつものが、限りなき永遠の宗教生命をうる主体ともいえよう。

法然はこの善導の『往生礼讃』における文を『選択集』第二章に引いて、往生者の心得を強調している。

私云見此文ニ弥須ニ捨難修専。豈捨二百即百生専修正行ニ而堅執二千中無一難修難行ニ乎。行者能思量之<sup>⑥</sup>と。

こうした善導・法然の立場を受けて弁長(二六三)三〇は、『四十八卷伝』(第四六卷)につきのようなことを伝え  
ている。すなわち、

安心起行の要ハ念死念仏にありとて、つねのことわきにハ、出るいきいるいきをまたす、いるいき出るいきをま  
さす、たすけ給へ阿弥陀ほとけ南無阿弥陀仏とぞ申されける。

と。弁長は法然のあとを受けて「安心起行の要は念死念仏にあり」といい、念仏者の心得を強調しているが、このこ  
とばはおそらく「前念に命終して、後念に往生する」ということばを受けての弁長の表現であろうと思われる。

弁長の後をついだ良忠(二九〇)三六七は、この「念死・念仏」について『選択伝弘決疑鈔』(卷三)に詳しく説明し  
ているが、『浄土大意抄』の最後における「念仏者常意得事」ではつぎのように述べている。その前に人の臨終にお  
ける五識の消滅のあとの心得について、

人終漸五識先滅是故目見エズ耳聞エズ香ヲモカカス味ヲモヲボエズ身ツメレドモ痛カラス成也特行心計残りテ  
其心最後ニテ終也其時念仏口申サルマジキ也意念有マシキ也此五識滅意識計有時始来迎預ランヲバ争テカ人外  
知自兼知ヘキ乎所詮心有程念仏申終来迎遅キヲハ疑ヘカラス  
とあり、ついで「念死・念仏」については、

先師云經論中六念八念九念明スト云ヘトモ如我只念死念仏二念有教示セラレ候此一言千念ヨリモ重実此二念常  
思ハンニ過タル事有ヘカラス念死云ハ終通レヌ死思出息入ラン事馮マザル也念仏云仏御力馮モシキヲ思出最後引  
接待ヘキ也北芒露何日消エン西土台其時期云云

とある。

良忠 在判

往生を求めるものの要は「念死・念仏の二念にあると教示せられ」とあり、「この一言千念よりも重し、実にこの



二念をつねに思わんに過ぎたることあるべからず」とあって「念死・念仏」の重要性を強調されている。「念死・念仏」の二念によって生死（見生）を超克し、まさしく「無生の生」に至らしめようとするものである。いずれにしても、往生を求めるものの要として示される、この「念死・念仏」の二念も、人間のいきざまのなかの心意の領域のものであることに変りない。称名をともしうことはいえ、そこに生じる心意である。避けることのできない死を先取して、永遠に生きる往生を現成していく、これが「念死・念仏」と表現されて強調される所以のものであろう。

## おわりに

往生とは「捨此往彼、蓮華化生」という表現において定義づけられ、それは現実の世界から浄土の世界に往き、蓮華のなかに化生することとして理解された。またその往生していく過程・様態は、見生（執着・虚妄）を滅して「無生の生」に至ることにほかならないが、それは心意の領域を出るものでないことも確認した。またその内容は前念・後念（前心・後心）というたんなる因果性としてでなく、そこに認めらる同一性・連続性において往生の過程・様態が説き示されていた（曇鸞・道綽）といえよう。

さらにそれは「前念に命終して、後念に往生する」といった具体的な表現によって示される（善導・法然）こととなり、その内容は一層実践的立場から捉えられ「念死・念仏」（弁長・良忠）ということばで示されるようになった。いずれにしても、往生していく往生者の過程・様態と、またその往生の主体ともみなされるものが、いずれも人間の心意の領域において捉えられ説き示されていることが明らかにになったと思う。

ここで、往生を求めるものに対して、より実践的な立場から、往生の過程・様態を説き示した忍激（西五〜七二二）のことばを記しておきたい。それは法然の『一枚起請文』を註釈した『吉水遺誓諺論』のことばである。まず、

一心に南無阿弥陀仏と申すを。随犯随懺の念仏とは云なり。たすけ玉へと思ふ時。妄念はおこらず。妄念おこる時。たすけ玉へを忘る。されども願行相統の意樂に住する程の人は。妄念おこるとする時。やがて助玉へと思ひ返すゆへに。念仏は常に主人となりて。妄念はいつも客人となれば往生の障とまではならず。等起の思が。よく善惡の業を成ぜずといへば。意樂を以て主人とすべし。剎那の妄念は。業を成ぜずといへば。念念生滅の任運無記の妄念は。みな客人にして。散地の凡夫の心の癖なり。あへて念仏の業道を碍ぐることを能はず。既に凡夫往生を許す。何ぞ妄念を嫌はんやと。蓮華受生の宗門には不思議にこれを許されたるぞ。

とあるのは、念仏者の実践上における妄念への注意と意樂に住する重要さとを説き示したものである。ついで、もし平生の時より廻心念仏せん人は。本願の上尽一形相応の機なれば。この機は必ず相統の二字を守りて。日名称名相統して怠らざるを肝要とす。其故は。平生の中には。臨終の如くなる勇猛心も発りがたく。又前念には念仏申て。惡趣の業を損減すれども。後念には惡念をこりて。やがてまた惡趣の絆をつなぎそふる凡心なれば。善惡つねに交りて。無間心にもあらず。無後心にもあらざる故に。平生の中には。たやすく引滿の二業を究竟成弁しがたきが故なり。

とあるのは、平生の時における念仏者の称名相統の肝要を説き示したものである。ついで、然れば、正しく観音の蓮台にのらんまでは、一期不退に随犯随懺して。願行相統の称名怠りなく。慥に聖衆の來迎をまち居て。ただ今の一念を空しく過ぎざるを吉水の正統。鎮西白旗の正流に。浴し得たる。念仏の行者とは名くるなり。

とあるのは、まさに往生を求めて称名念仏にはげむものへの注意である。「ただ今の一念を空しく過ぎざるを吉水の正統」という、「今の一念」を強調しているところに注意したい。

「前念に命終して、後念に往生する」ということが、「念死・念仏」と表現されたのであるが、所詮それは人間のいきざまのなかの心意作用としての念であり、「今の一念」であり、念仏の念にはかならない。それがまさに往生の主体ともなるということである。限りある肉体生命をもって限りなき永遠の宗教的生命を求めることが、ほかならぬ往生を求めることであり、それは「今の一念」を空しく過ぎぬところで現成される。念の字形は「今の心」にほかならぬが、それは称名念仏における「今の一念」であり、永遠に通ずる念であるといえる。

念仏の相続が強調されることは、まさに「今の一念」を空しく過ぎぬことであり、それは「永遠の今」としての瞬間（念仏）の継続である。ここに、往生を求める念仏者において、まさしくその人の心意の領域のなかで往生していく主体が形成されていくとみられる。往生を求める当事者においても、また客体として捉える往生者においても、念仏の念が「今の一念」として、「永遠の今」として、往生の主体を形成していくものと考えられる。法然のことばに、

往生ノ業成ハ、念ヲモテ本トス。名号ヲ称スルハ、念ヲ成セムカタメ也。モシ声ヲハナルルトキ、念スナワチ懈怠スルカユヘニ、常恒ニ称唱スレハスナハチ念相続ス。心念ノ業、生ヲヒクカユヘ也。<sup>②</sup>

とあるのは、まさに上述のように念によって往生が現成することをいい表わしているといえよう。

#### 註

① 藤田宏達著『原始浄土思想の研究』の「往生思想とその源流」五一九～五四〇頁、石井教道著『浄土の教義と其教団』の「往生論」三二六～三三四頁、「往生について」（総本山知恩院布教師会）に収められている河波 昌・沢田謙照・近藤徹称の三氏の論文など。ほか多数の著書・論文をあげることができるが割愛する。

② 源 哲勝著『業思想概説』の「生命の流れとしての阿頼耶識」三六～四九頁、舟橋一哉著『業思想序説』、上田義文著『仏教

における業の思想』など参照されたい。

- ③ 法然上人全集（石井編）一七頁。この本文には「往生西方極樂世界」とあるが、筆者は「往生西方極樂世界」とした。
- ④ 前掲『往生について』所収の近藤徹称氏論文（四一～二頁）には「捨此往彼」と「蓮華化生」との関係が述べられている。
- ⑤ 『観無量寿経』（浄全一の四六～五〇頁）の九品の説相、さらに善導の『観無量寿経疏』（浄全二の五五～七〇頁）の九品の解説によって明らかである。

- ⑥ 藤田宏達著『原始浄土思想の研究』五一九～五二二頁。

- ⑦ ASHIKAGA-SUKHĀVATĪYŪHA. p. 40, p. 19, p. 42, p. 14, p. 58, p. 48, p. 11. なる語がある。

- ⑧ Egerton—Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary. p. 125, p. 138, p. 376, を参照した。

- ⑨ ASHIKAGA-SUKHĀVATĪYŪHA p. 57.

- ⑩ Egerton-Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary. p. 139.

- ⑪ 浄土宗全書一の三三～四頁。

- ⑫ 浄土宗全書一の三四頁。

- ⑬ 藤田宏達著『原始浄土思想の研究』五二四～五頁。

- ⑭ 荻原雲来編『梵和大辞典』二六八頁。

- ⑮ Monier-Sanskrit-English Dictionary. p. 202.

- ⑯ 浄土宗全書一の二六～七頁。

- ⑰ 浄土宗全書一の二九二頁。

- ⑱ 浄土宗全書一の二九二頁。

- ⑲ 浄土宗全書一の二二二頁。

- ⑳ 大正藏經二五の三三六頁。

般若波羅蜜中衆生畢竟不可得。如<sub>二</sub>上品説<sub>一</sub>。舍利弗如<sub>二</sub>一切衆生不可得。寿者命者乃至知者見者等。衆生諸異名字皆空無<sub>レ</sub>実。此中何以問<sub>レ</sub>從<sub>二</sub>何所<sub>一</sub>來去至<sub>二</sub>何所<sub>一</sub>上。衆生異名即是菩薩。衆生無故菩薩亦無。又此經中説。菩薩但有<sub>二</sub>名字<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>実法<sub>一</sub>。今舍利弗何以作<sub>二</sub>此問<sub>一</sub>。答曰。仏法中有<sub>二</sub>三諦<sub>一</sub>。一者世諦。二者第一義諦。為<sub>二</sub>世諦<sub>一</sub>故説<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub>。為<sub>二</sub>第一義諦<sub>一</sub>故説<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>。

衆生無所有。

とある。

②① 淨土宗全書一の二二〇頁。

②② 淨土宗全書一の二四五頁。

②③ 淨土宗全書一の二四五―六頁。

②④ 淨土宗全書一の二六頁に、

問曰業道經言業道如秤重者先牽如一觀無量壽經言有入造五逆十惡具諸不善一墮惡道二經歷多劫受無量苦臨命終時遇善知識教稱三南無無量壽仏一如是至心令言不絕具足十念便得往生安樂淨土即入大乘正定之聚最長不退與三塗諸苦永隔先牽之義於理如何又曠劫已來備造諸行有漏之法繫屬三界但以十念念阿彌陀仏便出三界繫業之義復欲云何答曰汝謂五逆十惡繫業等為重以三下品人十念為輕應為罪所牽先墮地獄繫在三界者今當以義校量輕重之義在レ心在レ縁在レ決定不レ在レ時節久近多少也云何在レ心彼造罪人自依止虛妄顛倒見此十念者依善知識方便安慰一聞一実相法一生一実一虚豈得相比一譬如千歲闇室光若暫至即便明朗一豈得言一聞在室千歲而不去耶是名ニ在心ニ云何在レ縁彼造罪人自依止妄想心依煩惱虛妄果報衆生ニ生此十念者依止無上信心依阿彌陀如来方便莊嚴真実清淨無量功德名号一一生譬如有人被一毒箭所中截筋破骨聞一滅除藥鼓一即箭出毒除首楞嚴經言譬如有一藥名曰滅除若聞戰時用以塗鼓聞鼓聲者箭出除一豈可得言彼箭深毒廣聞一鼓音聲不能拔一毒菩薩摩訶薩亦復如是住一首楞嚴三昧聞一其名者三毒之箭自然拔出

義一十念者重者先牽能出三有兩經一義耳

とあるのがそれである。

②⑤ 淨土宗全書一の六八七頁。

②⑥ 淨土宗全書一の六八九頁。

②⑦ 浄土宗全書一の六八九頁。

②⑧ 浄土宗全書一の六八七頁。詳しくは、

問曰大乘經云業道如秤重処先牽云何衆生一形已來或百年或十年乃至今日無惡不造云何臨終遇善知識二十念相統即得往生若爾者先牽之義何以取信答曰汝謂一形惡業爲重以三品人十念之善以爲輕者今當以義校量輕重之義者正明在縁に決定不<sub>レ</sub>在時節久近多少也云何在<sub>レ</sub>心謂彼人造罪時自依止虛妄顛倒心生此十念者依善知識方便安慰聞<sub>ニ</sub>實相法<sub>ニ</sub>一生一實一虛豈得<sub>ニ</sub>相比<sub>一</sub>也何者譬如千歲闇室光若暫至即便明朗豈可得言闇在<sub>ニ</sub>室十歲<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>去也是故遺日摩尼宝經云仏告迦葉菩薩衆生雖復數千巨億万劫在<sub>ニ</sub>愛欲中<sub>ニ</sub>爲<sub>ニ</sub>罪所<sub>一</sub>覆若聞<sub>ニ</sub>仏經<sub>一</sub>二反念<sub>ニ</sub>善罪即消<sub>一</sub>也是名<sub>ニ</sub>在心<sub>ニ</sub>云何在縁者謂彼人造罪時自依止妄想依煩惱果報衆生今此十念者依止無上信心依阿弥陀如來真実清淨無量功德名号<sub>ニ</sub>生<sub>一</sub>譬如<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>人<sub>一</sub>被<sub>ニ</sub>毒箭所<sub>一</sub>中徹<sub>ニ</sub>筋破<sub>ニ</sub>骨若聞<sub>ニ</sub>滅除藥鼓聲<sub>一</sub>即箭出毒除豈可得<sub>ニ</sub>彼箭深毒<sub>一</sub>聞<sub>ニ</sub>鼓音聲<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>能拔<sub>ニ</sub>箭去<sub>一</sub>也是名<sub>ニ</sub>在縁<sub>ニ</sub>云何在決定者彼人造罪時自依止有後心有間心生今此十念者依止無後心無間心起是爲<sub>ニ</sub>決定<sub>一</sub>又智度論云一切衆生臨終之時刀風解<sub>ニ</sub>形死苦<sub>一</sub>來逼生<sub>ニ</sub>大怖畏<sub>一</sub>是故遇<sub>ニ</sub>善知識<sub>一</sub>第<sub>ニ</sub>大勇猛<sub>一</sub>心心相統十念<sub>ニ</sub>即是<sub>ニ</sub>增上善根<sub>一</sub>便得<sub>ニ</sub>往生<sub>一</sub>又如<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>人<sub>一</sub>對<sub>ニ</sub>敵破<sub>一</sub>陣一形之刀一時<sub>ニ</sub>盡用<sub>一</sub>其十念之善亦如是也又若人臨終時生<sub>ニ</sub>一念邪見<sub>一</sub>增上惡心即能傾<sub>ニ</sub>三界之福<sub>一</sub>即入<sub>ニ</sub>惡道<sub>一</sub>也

とあるのがそれである。

②⑨ 浄土宗全書四の三五七頁。

③⑩ 仏教大辞典(望月)四一五四頁には、念は smṛti の訳として、「心をして所縁の事を記憶し、忘失せしめざる精神作用」と説明している。仏教語大辞典(中村)一〇七八・九頁には、「おもい出す。記憶すること。忘れない心の作用。憶念ともいう」とあり、さらに「観ずる智慧。心のおもいを正す。」とある。また「心のはたらきという意味と、一瞬という二つの意味が重なっている話であるが、仏教では、心のはたらきから独立した時間を認めないから、要するに同じことになる」とも説明している。

③⑪ 拙稿「浄土教における生命の問題」(『浄土宗学研究』十三号の八八頁)に「念(いきさま)と生命(いきのうち)」との関係を

述べたつもりでいる。

③② 選択集（土川勸学宗学興隆会刊）二三頁。

③③ 選択集（土川勸学宗学興隆会刊）。

③④ 法然上人伝の成立史的研究第三卷の三三八頁。

③⑤ 浄土宗全書七の二六六―八頁、『決疑鈔』（三）の第八―三心篇には、まず、

而如予所存者唯在念死念仏二念云依之欲具厭欣心者常當於此二念係心不忘漸漸熏習厭欣盡発是重病者阿伽陀藥也納于心腑以勿聊爾一矣

とあり、念死については、

先言念死者智論二十二云念死者有二種死一者自死二者他因緣死是二種死行者常念是身若他不殺必當自死一如是有為法中不応彈指頃生三信不死心是身一切時中皆有死不待老不応待是種種憂惱凶衰身生心望安穩不死是心癡人所生身中四大各各相害如人持毒蛇篋云何智人以為安穩若出氣保當還入二入息保當出睡眠復得還覺是皆難必何以故是身内外多怨故如經說或有胎中死或有生時死或年壯時死或老至時死亦如菓熟時種種因緣墮一当求免離此死惡之怨賊是賊難可信捨時則安穩假使大智人威德力無上無前亦無後於今無脱者亦無巧辭謝無諸求得脱亦無捍格処可免者亦非持淨戒精進可脱死賊無憐愍來時無避処是故行者不応於無常危脆命中而信望活如仏為比丘說死想義有二比丘偏袒白仏我能修是死想一仏言汝云何修比丘言我不望過七歲活一仏言汝為放逸修死想有比丘言我不望過七月活有比丘言七日有言六五四三二一日活一仏言汝等皆是放逸修死想有言從旦至食時有言一食頃一仏言汝等亦是放逸修死想一比丘偏袒白仏我於出氣不望入於人氣不望出一仏言真是修死想為不放逸一比丘一切有為法念念生滅住時甚少其猶如幻欺誑無智一行者如是等種種因緣念死想一已上大莊嚴論云若人臨終喘氣彌出喉舌乾燥不能下水言語不了視瞻不端筋脉斷絶刀風解形支節舒緩機関止廢不能動轉一挙体酸痛如被鍼刺一命尽終時見三大

黑暗<sup>ヨ</sup>如<sup>レ</sup>墜<sup>ル</sup>深岸<sup>ニ</sup>、獨<sup>ニ</sup>逝<sup>テ</sup>曠野<sup>ニ</sup>、無<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>伴侶<sup>一</sup>、已<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>當<sup>ル</sup>知<sup>ル</sup>一切<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>皆<sup>ハ</sup>可<sup>ル</sup>免<sup>ル</sup>死<sup>一</sup>、一<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ル</sup>通<sup>ル</sup>若<sup>シ</sup>常<sup>ニ</sup>念<sup>ニ</sup>必<sup>ニ</sup>死<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>終<sup>ヲ</sup>者、寧<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>起<sup>ニ</sup>厭<sup>ハ</sup>怖<sup>ノ</sup>之心<sup>ニ</sup>哉<sup>一</sup>。

とあり、念仏については、

次言<sup>ニ</sup>念<sup>ハ</sup>仏<sup>ト</sup>者、華嚴云<sup>ニ</sup>又放<sup>ニ</sup>光明<sup>ヲ</sup>名<sup>ヲ</sup>見<sup>ハ</sup>仏<sup>ト</sup>彼<sup>ノ</sup>光<sup>ヲ</sup>覺<sup>ス</sup>悟<sup>ス</sup>命<sup>ヲ</sup>終<sup>ノ</sup>者、念<sup>ハ</sup>仏<sup>ト</sup>三昧<sup>ハ</sup>必<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>仏<sup>ヲ</sup>命<sup>ヲ</sup>終<sup>ノ</sup>之後<sup>ニ</sup>生<sup>ハ</sup>仏<sup>ト</sup>前<sup>ニ</sup>已<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>當<sup>ル</sup>知<sup>ル</sup>念<sup>ハ</sup>仏<sup>ト</sup>壽<sup>ヲ</sup>終<sup>ノ</sup>者、不<sup>レ</sup>見<sup>ハ</sup>三<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>黒闇<sup>ニ</sup>、又<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>至<sup>ニ</sup>黃泉<sup>ニ</sup>聖<sup>ニ</sup>衆<sup>ニ</sup>誘<sup>ハ</sup>引<sup>ル</sup>直<sup>ニ</sup>詣<sup>ニ</sup>淨土<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>安樂<sup>ニ</sup>集<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>界<sup>ノ</sup>衆<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>壽<sup>ヲ</sup>盡<sup>ニ</sup>命<sup>ヲ</sup>終<sup>ニ</sup>莫<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>皆<sup>ハ</sup>乘<sup>ニ</sup>善<sup>ニ</sup>惡<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>業<sup>ニ</sup>恆<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>司<sup>ニ</sup>命<sup>ニ</sup>獄<sup>ニ</sup>率<sup>ニ</sup>妄<sup>ニ</sup>愛<sup>ニ</sup>煩<sup>ニ</sup>惱<sup>ニ</sup>相<sup>ニ</sup>与<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>受<sup>ハ</sup>生<sup>ヲ</sup>乃<sup>ハ</sup>從<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>數<sup>ニ</sup>劫<sup>ニ</sup>來<sup>ニ</sup>未<sup>レ</sup>能<sup>ニ</sup>免<sup>ニ</sup>離<sup>ニ</sup>若<sup>シ</sup>能<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>歸<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>淨土<sup>ニ</sup>策<sup>ニ</sup>意<sup>ニ</sup>專<sup>ニ</sup>精<sup>ニ</sup>命<sup>ヲ</sup>欲<sup>ニ</sup>終<sup>ニ</sup>時<sup>ハ</sup>阿<sup>ニ</sup>彌<sup>ニ</sup>陀<sup>ニ</sup>仏<sup>ニ</sup>与<sup>ニ</sup>觀<sup>ニ</sup>音<sup>ニ</sup>聖<sup>ニ</sup>衆<sup>ニ</sup>光<sup>ヲ</sup>台<sup>ヲ</sup>迎<sup>ニ</sup>接<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>歡<sup>ニ</sup>喜<sup>ニ</sup>隨<sup>ニ</sup>從<sup>ニ</sup>合<sup>ニ</sup>掌<sup>ニ</sup>乘<sup>ニ</sup>台<sup>ヲ</sup>須<sup>ニ</sup>臾<sup>ニ</sup>即<sup>ニ</sup>到<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>快<sup>ニ</sup>樂<sup>ニ</sup>乃<sup>ハ</sup>至<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>仏<sup>ニ</sup>又<sup>ハ</sup>復<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>切<sup>ノ</sup>衆<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>造<sup>ニ</sup>業<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>種<sup>ニ</sup>謂<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>莫<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>皆<sup>ハ</sup>詣<sup>ニ</sup>閻<sup>ニ</sup>羅<sup>ニ</sup>取<sup>ニ</sup>判<sup>ニ</sup>若<sup>シ</sup>能<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>仏<sup>ニ</sup>因<sup>ニ</sup>緣<sup>ニ</sup>願<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>淨土<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>修<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>業<sup>ニ</sup>普<sup>ニ</sup>皆<sup>ニ</sup>回<sup>ニ</sup>向<sup>ニ</sup>命<sup>ヲ</sup>欲<sup>ニ</sup>終<sup>ニ</sup>時<sup>ハ</sup>仏<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>來<sup>ニ</sup>迎<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>干<sup>ニ</sup>死<sup>ニ</sup>王<sup>ニ</sup>也<sup>一</sup>已<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>當<sup>ル</sup>念<sup>ハ</sup>過<sup>ニ</sup>去<sup>ニ</sup>久<sup>ニ</sup>遠<sup>ニ</sup>已<sup>レ</sup>來<sup>ニ</sup>流<sup>ニ</sup>轉<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>界<sup>ニ</sup>輪<sup>ニ</sup>迴<sup>ニ</sup>六<sup>ノ</sup>道<sup>ニ</sup>具<sup>ニ</sup>受<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>切<sup>ノ</sup>身<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>大<sup>ニ</sup>苦<sup>ニ</sup>莫<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>皆<sup>ハ</sup>詣<sup>ニ</sup>閻<sup>ニ</sup>羅<sup>ニ</sup>王<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>取<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>裁<sup>ニ</sup>判<sup>ニ</sup>然<sup>ニ</sup>今<sup>ニ</sup>惡<sup>ニ</sup>業<sup>ニ</sup>如<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>積<sup>ニ</sup>亦<sup>ハ</sup>罪<sup>ノ</sup>障<sup>ノ</sup>如<sup>ニ</sup>海<sup>ニ</sup>深<sup>ニ</sup>居<sup>ニ</sup>諸<sup>ノ</sup>早<sup>ニ</sup>遷<sup>ニ</sup>逼<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>常<sup>ニ</sup>壽<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>還<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>死<sup>ニ</sup>近<sup>ニ</sup>念<sup>ニ</sup>今<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>若<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>厭<sup>ハ</sup>一<sup>ニ</sup>期<sup>ニ</sup>空<sup>ニ</sup>過<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>再<sup>ニ</sup>聞<sup>ニ</sup>琰<sup>ニ</sup>王<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>呵<sup>ニ</sup>責<sup>ニ</sup>今<sup>ニ</sup>幾<sup>ニ</sup>迴<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>月<sup>ニ</sup>哉<sup>一</sup>重<sup>ニ</sup>受<sup>ニ</sup>惡<sup>ニ</sup>趣<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>苦<sup>ニ</sup>果<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>旦<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>暮<sup>ニ</sup>早<sup>ニ</sup>厭<sup>ハ</sup>火<sup>ニ</sup>界<sup>ニ</sup>速<sup>ニ</sup>趣<sup>ニ</sup>淨土<sup>ニ</sup>若<sup>シ</sup>能<sup>ニ</sup>發<sup>ニ</sup>起<sup>ニ</sup>欲<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>願<sup>ニ</sup>當<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>是<sup>ハ</sup>人<sup>ノ</sup>具<sup>ニ</sup>足<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>とある。

③⑥ 淨土宗全書十の七二一頁。

③⑦ 淨土宗全書十の七二二一三頁。

③⑧ 淨土宗全書九の二八〇九頁。

③⑨ 淨土宗全書九の三一頁。

④① 淨土宗全書九の三三頁。

④② 「十七條御法語」法然上人全集（石井編）四六九頁。

〔注記〕この小論は、拙稿「淨土教における生命の問題」（『淨土宗学研究』十三号）から派生したともいうべきもので、取り扱った資料の一部が同じであることをお断りしておく。